

市民向け在宅医療推進フォーラム

おうちに帰ろう

一人暮らしでも、老老世帯でも、どんな病気があっても、通院困難になっても、いつでも大丈夫。多職種が上手に連携し協働して、願いや、思いをかなえられるようなシステムをつくりましょう

基調講演 住み慣れた「我が家で」暮らし続けるために ～地域包括ケアの姿～

加藤 久和氏 (加藤クリニック 院長)

おはなし

医師の立場から

喜多野 章夫氏 (喜多野診療所 院長)

訪問看護師の立場から

牛久 倫子氏 (訪問看護ステーションさわやか 所長)

下城 明子氏 (みむろ訪問看護ステーション 所長)

歯科医師の立場から

野阪 幸男氏 (野阪歯科 院長)

薬剤師の立場から

中本 政容氏 (ひかり薬局代表取締役 薬剤師)

理学療法士の立場から

湯川 直紀氏 (ライフケア創合研究所)

地域連携室の立場から

谷岡 美津子氏 (吉田病院)

介護支援専門員の立場から

日下 隆輔氏 (大和田の里)



日時

平成25年6月9日(日) 13:00～15:45

場所

奈良県奈良市ならまちセンター 市民ホール
奈良市東寺林町38番地(近鉄奈良駅より約10分)

参加費

無料

後援

奈良県・奈良市・奈良県医師会・奈良県歯科医師会・奈良県薬剤師会・奈良県病院協会
奈良県看護協会・奈良県理学療法士協会・奈良県社会福祉協議会・奈良県介護支援専門員協会

このフォーラムは公益財団法人在宅医療助成勇美記念財団の助成を受けています

お問い合わせ先：0744-20-0070 主催 (社)奈良県訪問看護ステーション協議会

市民向け在宅医療推進フォーラム報告書

(公益法人 在宅医療助成 勇美財団の助成金事業)

平成 25 年 7 月 6 日

奈良県橿原市四分町 252-1

一般社団法人

奈良県訪問看護ステーション協議会

小林 千恵子

はじめに基調講演では、2015年から始まる地域包括ケアシステムとは何か、そのために取り組まれていることを、国の政策方針に奈良県としての取り組みを現状を含めて説明されていました。また、介護保険と医療保険の違い、関わる職種の業務内容や役割についても説明され、介護支援専門員や地域医療連携室の役割の重要性もお話しされていました。

往診とは何？から、病院医療と在宅医療の違い、メリット・デメリットや自宅で迎える最期についてもお話しされていました。

新聞ではよく目にする地域包括ケアシステムの内容が具体化され、そういう意味なのだ、ということが理解でき、自分たちにも深く関わってくるのだ、ということが、認識できたと思います。

続いて、多職種を含めた「模擬カンファス」を展開しました。1事例めでは、現在よくある風景の「老々世帯」をテーマにした在宅生活でのサービス担当者会議。こちらでは、老々世帯の夫婦のみで住み慣れた自宅で、どのようにすれば安心して暮らしつつ生きていくことができるのか、をテーマに話し合いを展開して頂きました。多職種が協力・役割分担をすれば、介護者だけが負担を背負わなくていい・老夫婦2人でも自宅で過ごせることができるんだ・自宅でもこんな会議をしてみんなで方向性を認識・協働してゆけるのだ、と理解して頂けたのではないかと、思います。

続いて、2事例めでは「がん末期の方が自宅で最期をむかえたい」をテーマに、退院前カンファレンスを展開して頂きました。家族だけが頑張らなくていい・どんな状況であっても(医療依存度が高くて)「帰りたい」思いがあれば、支援やサポート体制の充実が伝わったのではないかと、思います。

参加いただいた1人でも多くのかたが、自身の余生・最期の場所に「自宅」「在宅」を選択肢もしくは望んで頂けるお気持ちになっていただければ幸いです。

なお、今回の市民向け在宅医療推進フォーラムは、公益財団法人 勇美記念財団の助成を受けて開催致しました。

市民向け在宅医療推進フォーラム開催要項

《目的》

誰もが願う住み慣れた地域や自宅で暮らし続けることができるよう、一人暮らしであっても、老々世帯であっても、どんな病気があっても、通院困難な人も適切な医療が自宅で受けられるシステムを構築するため、在宅医療に携わる関係職種の方々と在宅で介護をされた家族の体験談を通じて在宅医療の推進を図る。

《効果》

今後、独居高齢者や老々世帯が増える中で、病気があっても住み慣れた地域で最期まで暮らしていきたいと願う方々を支えるために、医療と福祉が信頼関係のもと上手に連携し、願いを支えていけるよう医師や、看護師等の具体的な事例を通して示唆し、自分らしい生き方・逝き方を自ら考えるきっかけづくりをする。

《催し物の名称》

テーマ：住み慣れた「我が家」で暮らし続けるために ～おうちへ帰ろう～

《主催》

奈良県訪問看護ステーション協議会

《日程等》

日 時：平成 25 年 6 月 9 日（日）13：00～15：45

場 所：奈良市ならまちセンター 市民ホール

プログラム：基調講演 加藤クリニック 院長 加藤 久和氏

おはなし

医師の立場から：喜多野診療所 院長 喜多野 章夫氏

歯科医師の立場から：野阪歯科 院長 野阪 幸男氏

訪問看護の立場から

訪問看護ステーションさわやか 所長 牛久 倫子氏

みむろ訪問看護ステーション 所長 下城 明子氏

地域連携室の立場から：医療法人平和会 吉田病院 谷岡 美津代氏

薬剤師の立場から：ひかり薬局 代表取締役 中本 政容氏

理学療法士の立場から：株式会社ライフケア創合研究所

湯川 直紀氏

介護支援専門員の立場から：大和田の里 日下 隆輔氏

《後援(予定)》

奈良県、奈良市、県医師会、県歯科医師会、県薬剤師会、県看護協会、県病院協会、
県社会福祉協議会、県介護支援専門員協会 県理学療法士協会

《対象者》 一般県民及び在宅医療の関係者等 延べ 300 人

《入場料》 無料

なおこのフォーラムは公益財団法人在宅医療助成勇美記念財団の助成を受けています

平成 25 年度勇美財団市民向け在宅医療推進フォーラム

【タイムスケジュール】

		時 間		内 容		準備	担当者名
1		～	11:00		ならまちセンターホール前に役員集合		全員
2	11:00	～	13:00		受付・アンケート用紙等準備	出席表、アンケート、ペン	浜田・杉本 川田
					会場準備(*各自昼食お願いします)	垂れ幕、机 2、 机 7、演台、 マイク、pc、プロ ジェクター、ポイン ター、水	下城・田端 牛久
					控え室準備	お茶、おやつ	
	13:00	～	13:30		受付開始	謝金、領収書	下城
	13:25			5	オリエンテーション		
	13:30	～	13:35	5	会長挨拶		小松会長
	13:35	～	14:05	30	基調講演 加藤先生	pc、ポインター	
	14:05		14:15	10	カンファレンスの説明・舞台セッティング	机 3、机 9、 マイク 3、演 者の紙	
	14:15	～	14:40	35	カンファレンス開始・事例 1		
	14:40	～	14:45	5	加藤先生より事例 1 のまとめ	Pc、ポインター	
	14:45	～	15:20	35	カンファレンス開始・事例 2	机 3、机、演 者の紙	
	15:20	～	15:25	5	加藤先生より事例 2 のまとめ		
	15:25	～	15:50	25	各専門職より市民に伝えたいこと各 3 分		
	15:50	～	15:55	5	加藤先生まとめ		
		～	16:00		閉会		
					フォーラム中に片付け 受付		
					// 控え室		

担当 司会() 受付()
会場・控室準備()

フォーラム打ち合わせ

日時：H25年5月15日 19時から21時

場所：なら町センター第4会議室

参加者：ステーション協議会役員、講師7名

打ち合わせ内容

- 1、 会長より趣旨説明（5分）
- 2、 プログラム、当日タイムスケジュールの説明
- 3、 自己紹介
- 4、 加藤先生より基調講演の概要
- 5、 カンファレンスの内容説明、進め方について
- 6、 具体的な内容の検討（①はケアマネ②は退院調整ナースを中心に）
- 7、 まとめ、終了

事例1 「何とか2人で住み慣れた自宅での生活を続けたい」

1. ケアマネ「①挨拶
 - ②事例概要と本日の会議目的の説明
 - ③自己紹介の提案
 - ④本人と夫に今の様子をたずねる」
2. 本人「今思ってること」

夫「今思ったり感じたりしていること。心配や大変なこと(食事のこと必ず含む)」
3. ケアマネ「今お話しにあったように・・・
先生(医師)にたずねる」
4. 往診医「①食事も含んだ全身状態のこと
 - ②口腔内のこと
 - ③食事形態のこと
 - ④嚥下(嚥下リハビリ含む)のこと」
5. ケアマネ「4-②について、歯科医師に提議」
6. 歯科医師「①部分義歯であること・現在の口腔内の様子(簡略で)
 - ②義歯も含めた口腔内のケア方法・歯科衛生士の説明
 - ③定期的な診察の重要性・訪問歯科」
7. ケアマネ「4-③食事形態について、訪問介護から現状の食事内容や食事の様子」
8. 訪問介護「食事内容と食事の様子」
9. 本人「食事に関しての意見」

夫「夫からみた食事の様子」
10. ケアマネ「4-③・④に関連して、訪問看護はどうみてるのか」
11. 看護師「訪問中の様子」
12. ケアマネ「4-③・④に関連して、訪問リハビリはどうみてるのか」
13. PT「訪問中の様子」
14. ケアマネ「4-③・④具体的に提議」
15. 訪問介護「具体案を提示」
16. 看護師「具体案を提示」
17. PT「具体案(ST)を提示」
18. ケアマネ「ほかに何か日常生活で気をつけることは?のような…」
19. 医師「骨折の既往と転倒のリスク」
20. ケアマネ「住宅改修や福祉用具は導入していること。訪問リハビリの様子」
21. PT「訪問リハビリの内容」
22. ケアマネ「関わっているスタッフが共有できるようなメニュー」

23.PT「具体的メニューと留意点の提示」

24.ケアマネ「①本日のまとめ

*登場していなくて必要なサービスあれば追加説明含む

②今後のこと：また必要時担当者会議開催できることなど

③お礼」

25.本人・夫「思い：自宅で過ごしたいこと・安心したことなど」

事例2 「最期は今まで過ごした家で過ごしたい」

1.地域連携室「①挨拶

②事例概要と本日の会議目的の説明(自宅に帰りたい意向)

③自己紹介の提案」

*自己紹介の際、本人・妻は思ってることも含んでいただいてもいいです。

2.地域連携室「まず入院中の担当主治医からの病状説明」

3.病院医師「①疾患名と入院中の経過・治療内容

②痛みのコントロール(麻薬のこと)

③予後や今後の見通し」

4.地域連携室「在宅医へこのようなケースですがどうでしょうか?のような提案」

5.在宅医師「本人・妻へのなげかけ」

6.本人「家に帰りたいこと・家に帰ってしたいこと・痛くならないのか・不安なことなど」
妻「機械がついていることや状態変化が(今後どうなるのか・どうなっていくのかなど)
不安なこと・してあげたいことなど」

7.在宅医師「今後の予測される身体変化の説明」

「医療機器(輸液・在宅酸素)・急変時や24時間対応について・訪問看護へのなげかけ」

8.訪問看護師「医療機器・24時間体制のこと・精神的変化や不安への対応など

ほかに気になる事ないですか?」

9.本人・妻「今は麻薬も使ってるみたい・麻薬のこと・怖いこと」

10.在宅医師「麻薬の必要性や危険性・きちんと使用すれば怖くないこと・薬剤師への投げかけ」

11.薬剤師「麻薬の取り扱い・薬剤関連のこと・薬剤師の役割など」

12.夫・妻「予後も聞いているが不安は大きいし、病院から帰ったらもう病院には戻れないように思うんです。家でって決めたら絶対家ですか?みたいな」

13.病院医師・在宅医師「病診連携をとること・一度決定した意思決定が必ずではないこと」 「終末期場所の提案」

14.夫・妻「そのシステムの理解と安心したこと」

15.地域連携室「では実際自宅に帰ってからのこと・ケアマネへの投げかけ」

16.夫・妻「電動ベッドがラクだけじゃないこと・マットも欲しい・自宅段差あるなど
自宅での課題を提案」

17.ケアマネ「在宅サービスのこと・福祉用具・福祉タクシー・訪問介護や訪問入浴のこと など」

- 18.本人・妻「安心して自宅に帰れる」
- 19.地域連携室「①本日のまとめ・また不安なことなどあればいつでも言ってくれるように伝える
②退院日のこと→ケアマネにふる」
- 20.ケアマネ「準備期間の目安・必要最低限(ベッドの搬入等の目安)の準備があれば退院できること・退院してからも住宅改修など間に合うこと等」
- 21.本人・妻「思い」
- 22.地域連携室「お礼」

「市民向け在宅医療推進フォーラム」振り返り会議

日時：平成 25 年 6 月 9 日 17 時 00 分から 20 時 00 分まで

参加者：講演の先生方 6 名、ステーション協議会役員 8 名、県長寿社会課 1 名
県職員 1 名

場所 C a f e G e n t r y

内容 フォーラム参加者 101 名

(良かった点)

- ・地域包括ケアシステムについて、理解していただく機会になったのでは。
- ・模擬カンファレンスの進行が非常にスムーズであり、かつ自然体(演技にならず)で行われたことで、見ていただいた方にも受け入れてもらいやすかった。
- ・自宅での担当者会議や、退院前カンファレンスが日常的に開催される現状があるが、実際参加できる人には限りがあるので、関わりのない方にもイメージをして頂く機会になったのではないか。
- ・周知の際、北部の事業所の方・県職員等関係団体の協力も得られたことで、市民の参加が非常に多くみられた。
- ・企業出店により、補助食品等に実際触れて頂くことができた。

(反省点)

- ・今回、サービス担当者会議形式のため、講師依頼の人数が多く、協力者への日当等の削減が生じたこと
- ・担当者である自身が北部で業務に携わっていないことで、多くの方に十分な周知を行うことが出来ていなかった。
- ・今回の開催内容ならば、医療系大学等の学生にも参加の周知をすべきであった。

(参加者の声)

- ・基調講演の話し方が、優しくて流暢でわかりやすかった。
- ・グラフもよくわかった。
- ・カンファレンスはイメージができやすかった。
- ・カンファレンスの流れが自然体だった。
- ・同調できることがたくさんあった。